

位置と環境

遺跡は、大口盆地を形成する北辺の十曾付近の丘陵から連続する火山灰台地の先端の大口市山野小木原に所在する。日勝山遺跡はこの台地先端部の中腹の平坦地とその後方の高地の二ヶ所を呼ぶが、それぞれ時期の異なる土器を出土する。後方の高地は縄文時代早期の塞ノ神式土器を中心に出土し、中腹の平坦地では縄文時代前期の曾畑式系土器（日勝山式土器）を出土する。

調査の経緯

本遺跡は、昭和7年頃から寺師見國や木村幹夫らによって採集されて判明した遺跡で、発掘調査されたことはない。その表採資料をもとに研究が進められ、中央学界へ紹介され日勝山式土器の標識遺跡となっている。

遺構と遺物

表面採集のため遺構は確認されていないが、出土遺物は多種みられる。本遺跡を標式とする日勝山式土器のほか、縄文時代早期の押型文土器や塞ノ神式土器、前期の轟式土器、中期の阿高式土器などである。

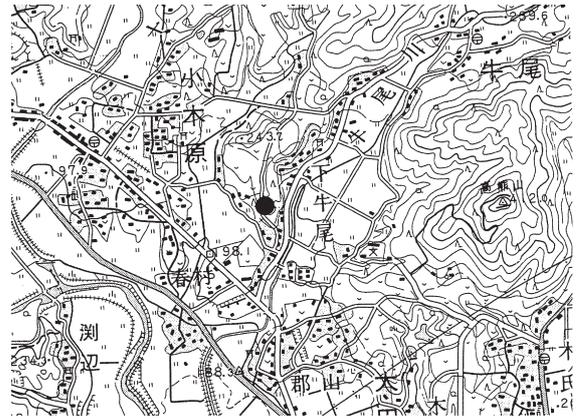
特徴

本遺跡から比較的純粋に出土した日勝山式土器は木村幹夫によって注目され、当時としては高い水準の論考として中央学界に紹介されている。

まず、純粋と考えられる一型式に属す土器群を細かく分析している。土器の胎土・焼成から、滑石を多量に混入した茶褐色ないし黒褐色を呈する一群と滑石の混入のない茶褐色ないし黒色の一群の二類に分類している。

文様については、胎土・焼成の二類間の区分は困難で、二類間に通じる6種に分類している。①平行斜線文（口縁部直下に）、②平行水平線文（口縁部直下に）、③連点文（多くは口縁部）、④羽状文（口縁部から胴部）、⑤三角文（口縁部から胴部）、⑥弧文（多くは胴部）である。

そして、九州において類品を求めるなら熊本県曾畑貝塚出土土器に全く一致するとし、本土器は南九



第1図 日勝山遺跡の位置

州においてとにかく注目されるべき土器と結んでいる。

この日勝山式土器と呼ばれた曾畑式系土器は、その後、金峰町阿多貝塚や福岡県野口遺跡で発見されて明らかとなった曾畑式土器に先行する土器型式であることが判明した。

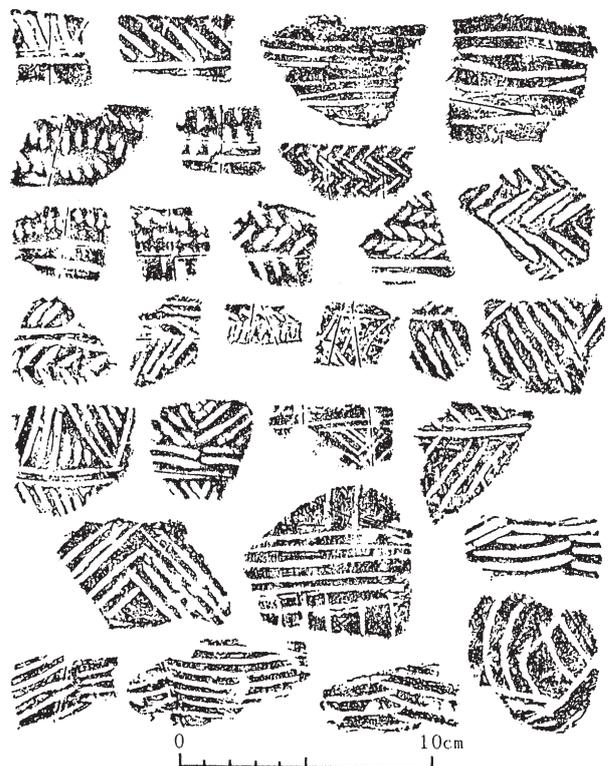
資料の所在

採集遺物は、鹿児島県歴史資料センター黎明館に寄託収蔵されている。

参考文献

木村幹夫1939「薩摩国伊佐郡日勝山土器について」『考古学』第7巻9号

(新東晃一)



第2図 日勝山遺跡発見土器